

坂井建雄, 河田光博 (監訳)

プロメテウス解剖学アトラス 頭部/神経解剖

濱口豊太 (埼玉県立大准教授・作業療法学)

心理に影響する頭部/神経解剖

『プロメテウス解剖学アトラス 頭部/神経解剖』は視認性に優れた解剖図と洗練された説明文によって学習者の知的吸収を促進する肉眼解剖学教科書である。先に刊行された第1巻には、総論と運動器系、第2巻には頭部・胸部・腹部・骨盤部が収録され、第3巻の本書は、高次神経機能を支える脳と脊髄、神経機能としての知覚系、運動系が展開されている。頭部に集中する視覚・前庭覚・聴覚・味覚・嗅覚などの知覚受容器と、消化器と呼吸器の入口である口腔、咽頭部の学習に適した書である。

「全体から局所へ」、「単純から複雑へ」、「一つの器官から臓器間の機能的関連へ」、本書のシリーズは一貫していくつかの段階に分けて解剖している。最初に頭蓋左側面を示し、左側面から見た骨の範囲や境界を識別して局所の構造理解へと誘う。全体から局所への流れだ。頭蓋骨構造の次は表情筋が概観され、そこに血管、神経、結合組織などの位置関係と機能が解説される。脳神経の序盤までの図は立体的かつ色で識別された肉眼解剖図であるが、それ以降、単純平面図と立体構成図とを使い分けている。これは単純から複雑な構造の理解を読者にもたやす手法であろう。脳幹の神経核や末梢神経節の局在と神経走行、あるいは、視覚・聴覚・前庭覚などの知覚器の構造と機能を読者に理解させるために、この手法は効果的だ。

読者はこのような教育的配慮を受けながら、脳—神経—筋、脳—知覚器、内臓諸臓器の接続によって

臓器間の機能的関連までを理解できる。加えて、随所に解剖学的位置、触診部位、視診部位、病変したときの症状などが図解される。本書は人体構造とその機能のみならず、適宜に診断と治療への示唆までを具備している。

表情筋の構造と機能には他者の心理に働きかける作用がある。心理情報授受の手段としてヒトの表情変化が系統的な解剖学書に解説されたのは本書が初めてではないだろうか。本書には「頭部の筋」の節に表情筋の作用として「口輪筋の収縮は決意を表す」「頬筋の収縮は満足を表す」など12種類の表情筋の心理作用が示されている。神経解剖の章、機能系では知覚系に並んで辺縁系がある。脳地図の上に帯状回と海馬と扁桃体がブロードマンの領域番号とともに描かれ、「辺縁系は衝動や情動行動に関与し、記憶、学習にも関わっている」と解説されている。同じく機能系「脳：臨床」には特定の脳領域の傷害に起因する行動変化が辺縁系の解剖図とともに示されている。脳と諸臓器の連絡が解剖学で明らかにされ、それらが心理・行動発現の基盤となる様が解剖学書に記されたことは、行動医学、心身医学を追究する者に勇気を与えることだろう。

本書の図解は、解剖学ならびに脳科学の膨大な情報量とその複雑さや深さを読者に感じさせない。それほど本書は整えられている。医学のみならず、心理学や教育学にも本書を参考としてみる価値がある。(A4変型 432頁 定価 11,000円＋税 医学書院刊 2009)